

長安城

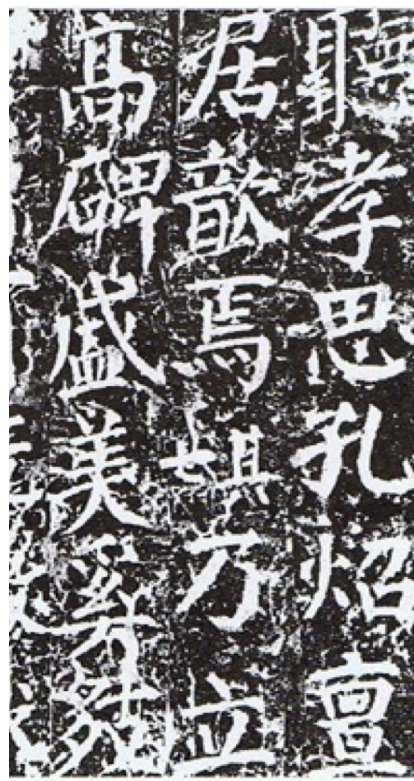


大明宮 含元殿復元イメージ

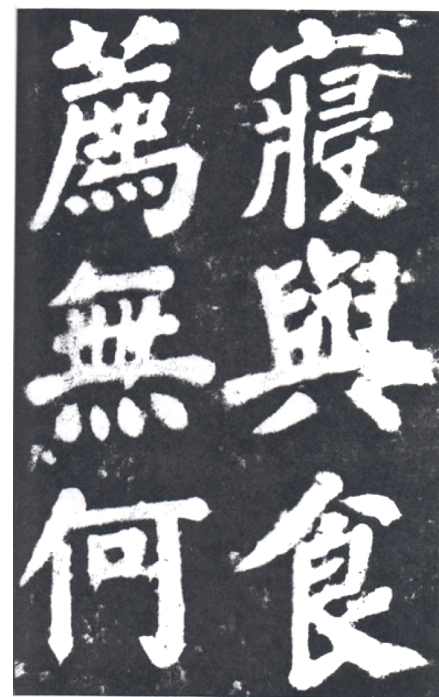
長安城は東西約9・7 km、南北約8・7 km。朱雀大路の路幅は約150 m。平安京は東西約4・4 km、南北約5・3 km。朱雀大路の路幅は約84 m。宮城を西内、大明宮を東内、興慶宮を南内という。南内は玄宗が建てたもの。



整拓本



郭氏家廟碑 (広徳2年・764) 顔真卿55歳の撰文と書。11月長安で書かれた。楷書、碑陰は楷行書。題額は代宗。



鮮于氏離堆記 (宝応元年・762) 顔真卿53歳の撰文と書。楷書。磨崖碑。



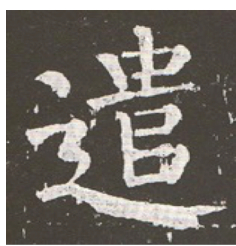
れいきひ
礼器碑(後漢・156)



そうしけんひ ずい
曹子建碑(隋・593)

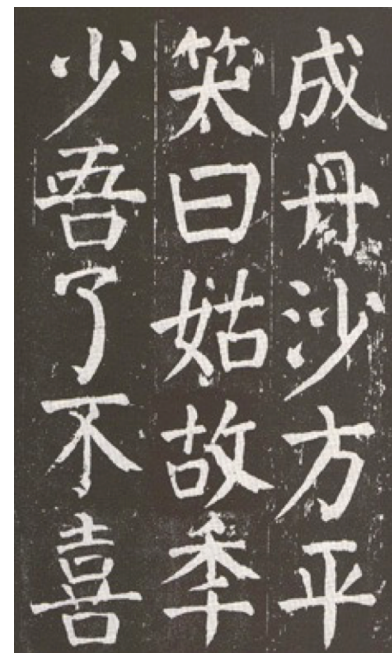


小篆の「光」

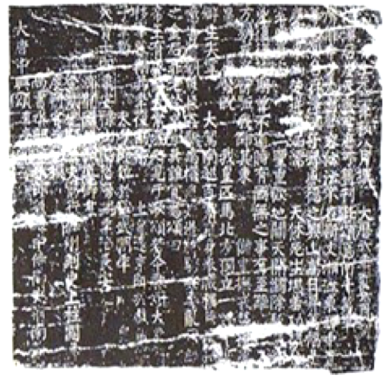


願法の特徴

さんとうえんび
蚕頭燕尾



まこせんだんき だいいほん
麻姑仙壇記・大字本 (大暦6年4月・771)
顔真卿62歳の撰文と書。楷書。字大約5cm。



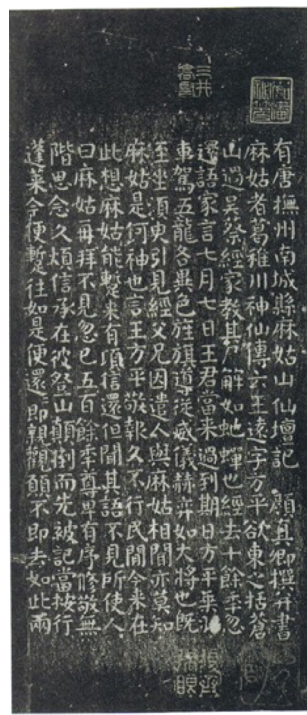
整拓本（縦横 2.8m.の方形）



部分

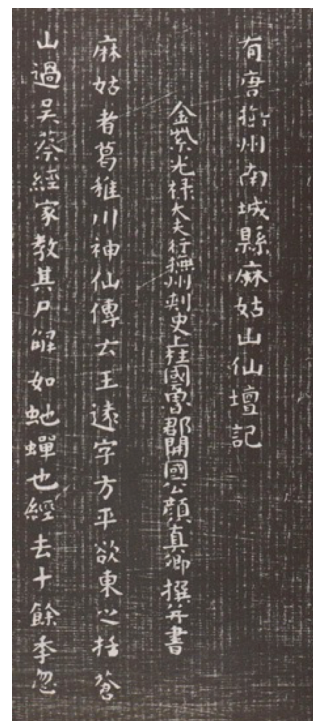
大^{だい}唐^{たう}中^{ちゆう}興^{きう}頌^{しやう}

771 年（大暦 6） 6 月 顏真卿 62 歳の楷書、撰文は元結 48 歳。



麻^ま姑^こ仙^{せん}壇^{だん}記^き・小^{しょう}字^じ本^{ぼん}

部分 771 年 4 月 字径約 1 cm

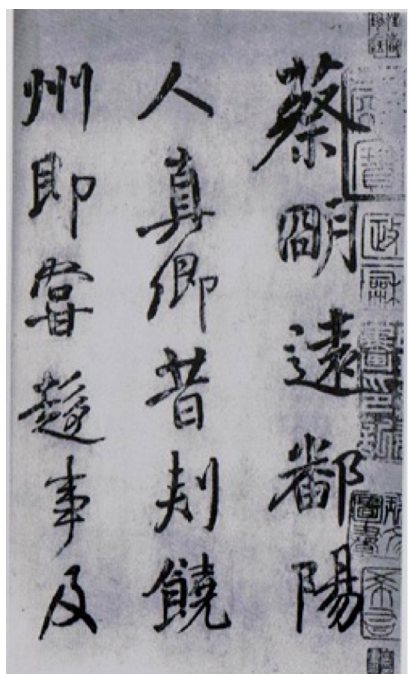


麻^ま姑^こ仙^{せん}壇^{だん}記^き・中^{ちゆう}字^じ本^{ぼん}

部分 771 年 4 月 字径約 2 cm 偽筆？



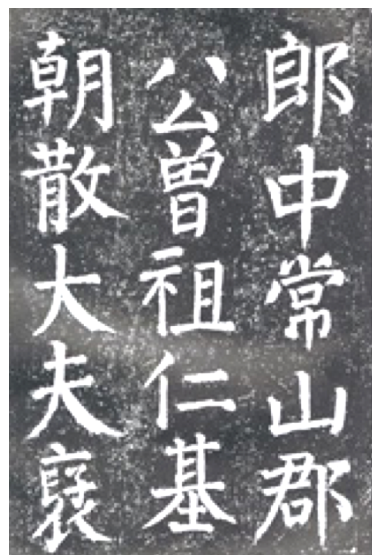
顏真卿の足跡



與蔡明遠帖

772年（大暦7）頃。

顔真卿63歳頃の行書。



元結碑

772～777年（大暦7～12）

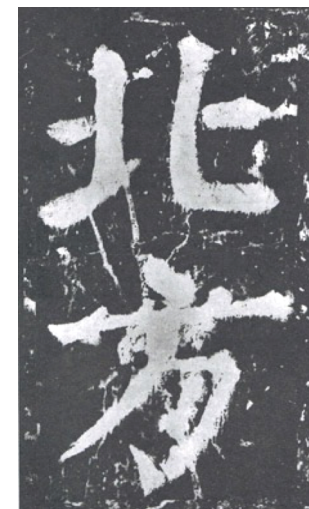
顔真卿63歳の楷書と撰文。元結の墓碑銘である。四面刻。



整本



呉溪のほとりにある「三絶堂」（三絶とは書と文と景色のこと。碑がこの堂の後ろの岩壁に刻されている）

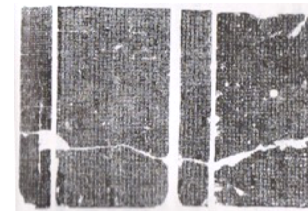




碑側記より

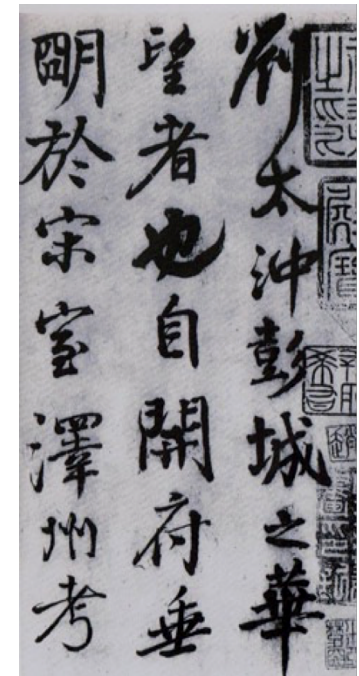


碑側記
ひそくき



整本

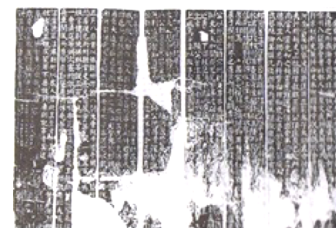
宋璟碑 772 年（大暦 7） 9 月 顏真卿 63 歳の楷書と撰文



送劉太沖序 772 年（大暦 7）頃？顏真卿 63 歳頃の行書。

八関斎会報徳記

772 年（大暦7） 顔真卿 63 歳の楷書と撰文

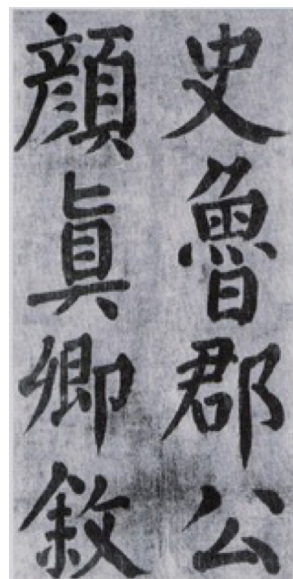
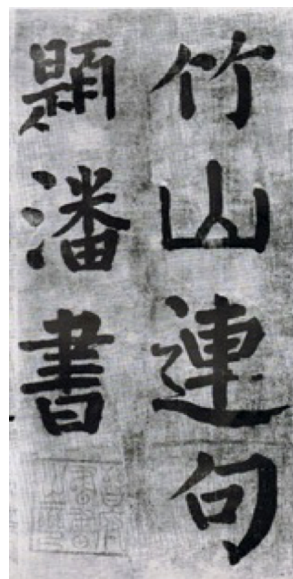


整本



竹山連句

774 年（大暦9） 3 月 顔真卿 65 歳の楷書

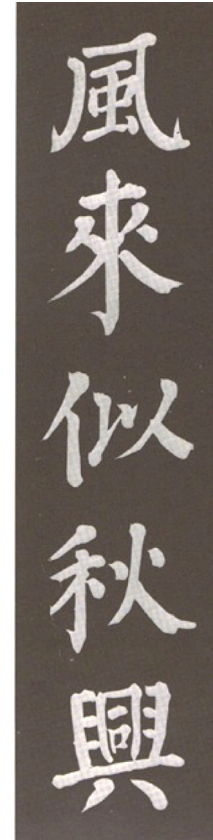




「秋碧堂帖」より



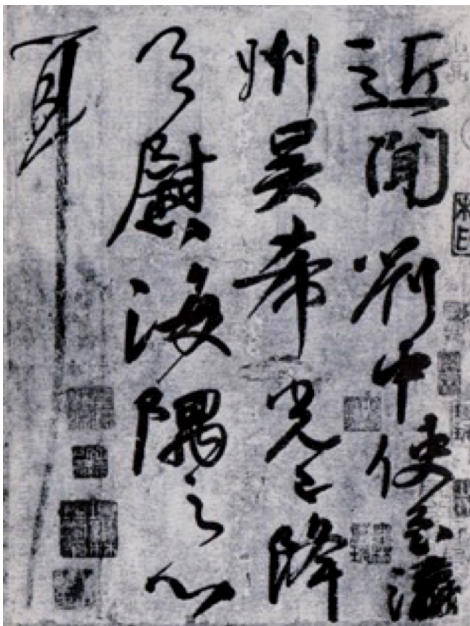
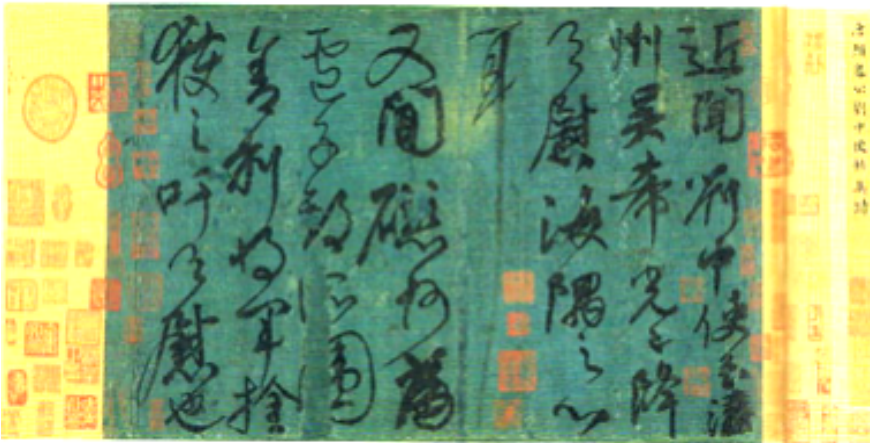
道を守りて心
みずか
自ら樂し。



風来りて秋興
しゅうきよう
に似る。

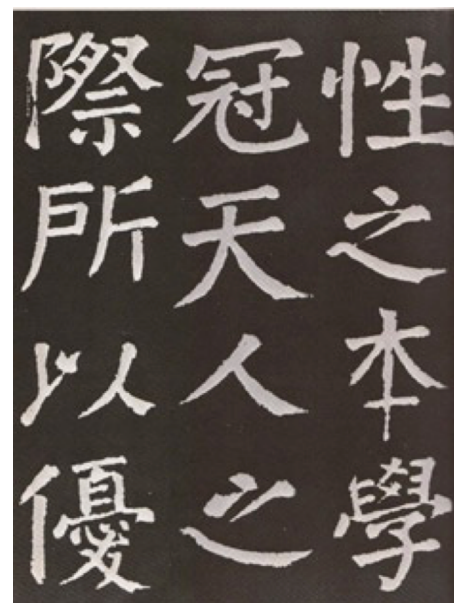
劉中使帖
りゅうちゅうしきてい

775年（大暦10）頃 顔真卿66歳頃の行草書



李玄靖碑
りげんたいひ

777 年（大暦 12）顔真卿 68 歳の楷書と撰文

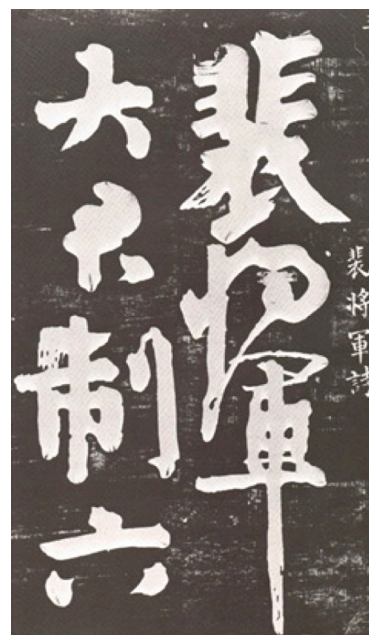


裴將軍詩
はいしやうくんし

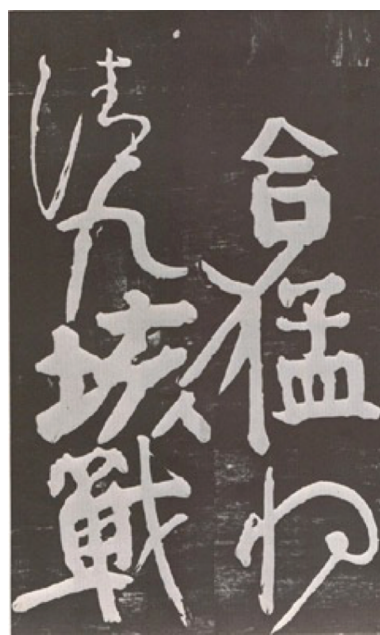
制作年不詳 伝・顔真卿

「忠義堂帖」より

裴將軍。大君制六

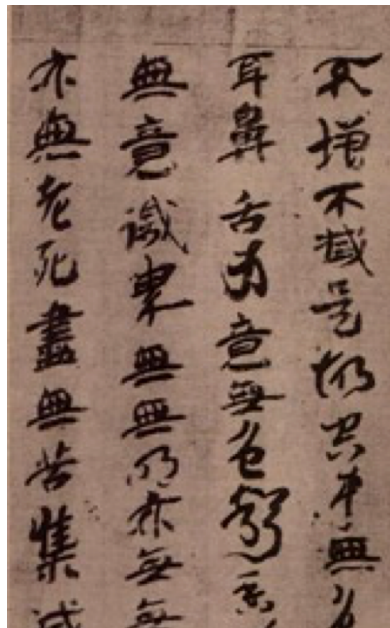


合。猛將 清九垓。戰



馬若龍 虎。騰

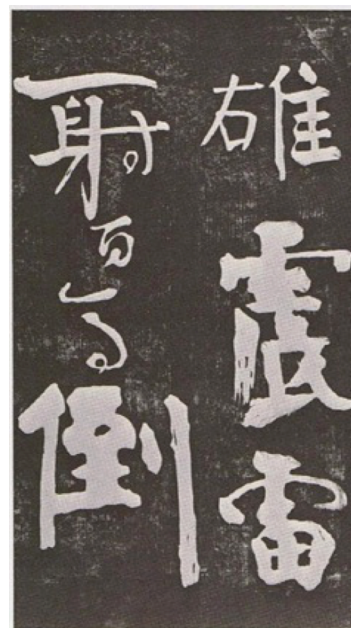




伝・空海
破体心経



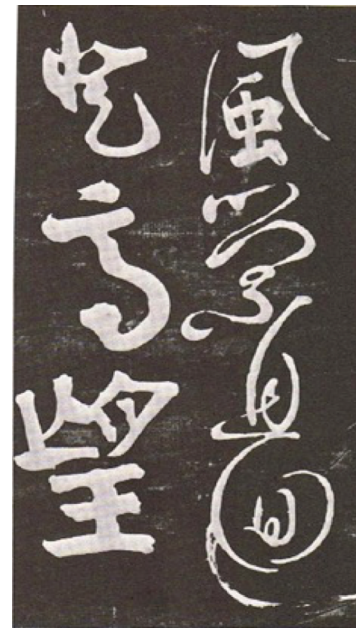
曹子建碑
593年・隋



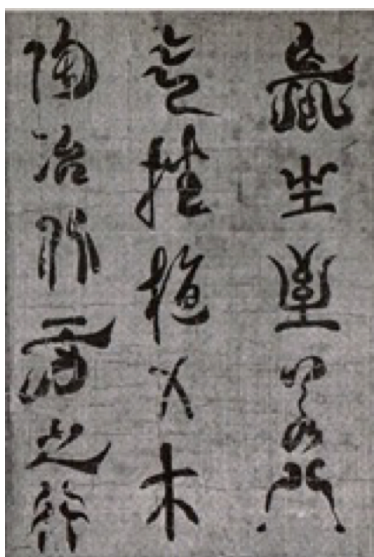
雄震雷。
一射百馬倒。



天山。白雪



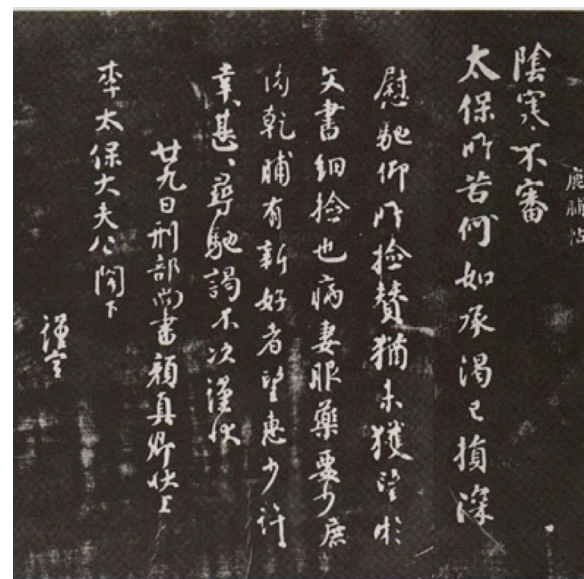
風繁且廻。
登高望



伝・空海
益田池碑銘

鹿脯帖

777 年（大暦 12） 忠義堂帖より 李太保への手紙。行書。



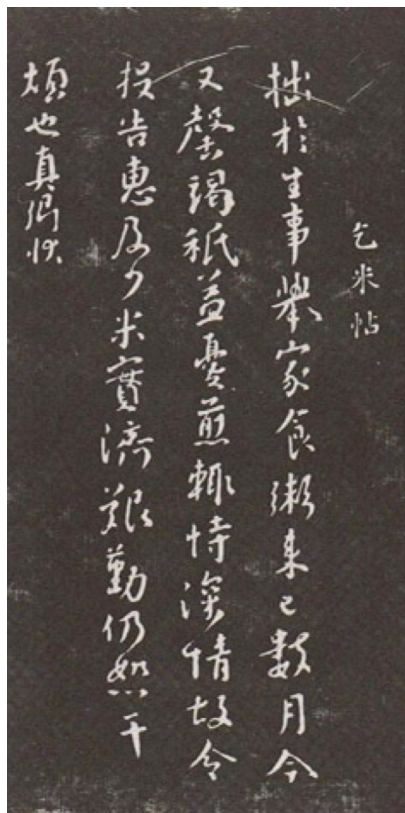
陰寒。不審
太保所苦何如。承渴已損。深
慰馳仰。所檢贊猶未獲。望於
文書細檢也。病妻服藥。要少鹿
肉乾脯。有新好者。望惠少許。
幸甚幸甚。尋馳謁。不次。謹狀。
廿九日刑部尚書顏真卿狀上
李太保大夫公閣下。 謹空

病妻のために鹿の乾し肉を恵んでくださいと求める手紙。

※「脯」・ほしし、ほじし、と読む。干し肉、乾し肉、乾肉とも書く。
ほしにくのこと。乾燥させた鳥獣の肉のこと。
褚遂良の書風を継承している。

乞米帖

777 年（大暦 12） 忠義堂帖より 李太保への手紙。行書。



拙於生事。舉家食粥來已數月。今
又罄竭。祇益憂煎。輒恃深情。故令
投告惠及少米。實濟艱勤。仍恕干
煩也。真卿狀。

「私の世渡りがへたで、一家みんな
で粥をすすって、この数カ月をしの
いでおります。今ではさらに食べ物
が底をつき、心配ばかりが増えてし
まいました。そこで、あなたの御厚
情にすがって、お手紙をいたしまし
た。少量の米を恵んでくださるよう
お願いする次第です」

顔真卿の左遷の理由

760 年 8 月 刑部侍郎（法務次官）から蓬州長史に左遷されたのは、蜀から長安に帰ってきた上皇（玄宗）は興慶宮（南内）に入ったが、権力を奪いかえされるのではないかと疑った肅宗派の宦官李輔国によって大極殿（西内）に移らされた。この時、顔真卿は百官をひきいて上皇のご機嫌を伺った。このことで上皇派だととられ、李輔国により蜀の蓬州へと左遷されたのである。

766 年 2 月 峽州別駕（次官）に左遷されたのは、宰相の元載の意見に反対した事などからである。
元載は誰かに弾劾され皇帝に訴えられることを恐れ、代宗に、百官は意見があるならまず長官に言い、つぎに長官から宰相に言上し最後に宰相が皇帝に言うべきであると言った。代宗は同意してそのようにするよう百官に諭した。これに対して顔真卿は「百官は陛下の耳目である、これでは耳目を掩うことになる・・・玄宗時代に李林甫が同じことをしたことの弊害の大きかったこと」を論じ、真正面から元載に反対した。元載は顔真卿に今後とも誹謗されるものと考え地方へとばしたのである。

777 年 6 月（大暦 12）元載が失脚し、真卿は中央に呼び戻され、刑部尚書（法務省長官）ついで吏部尚書（人事院長官）となり礼儀使を兼務した。